慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	特集「21世紀日本社会の階層と格差」序言
Sub Title	
Author	鹿又, 伸夫(Kanomata, Nobuo)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2012
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.17 (2012. 7) ,p.1- 2
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 : 21世紀日本社会の階層と格差
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20120700-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

特集「21 世紀日本社会の階層と格差」序言

鹿又　伸夫

本特集は2011年7月9日に開催された三田社会学会大会シンポジウムの報告者とコメンテーターが寄稿したものである。同シンポジウムでの報告と議論をそのまま文章化しているとは必ずしもいえない。報告を洗練化した論文、報告の一部に焦点をあてた論文、報告に触発された新たな論文などが含まれている。

シンポジウムでの報告は次のような趣旨で募られ、4 つの研究が報告された。

【シンポジウム企画趣旨】21 世紀になって、日本社会の不平等・格差拡大が幅広く認識されるようになり、不平等・格差を拡大させてきた要因として雇用構造、人口構造および家族構造の変動などが指摘されている。つまり、非正規雇用や高齢者の増加そして世帯構造の変化などが格差拡大にかかわっているとされる。ところが社会学で社会的不平等を扱ってきた階層・移動研究では、安定した雇用・人口・家族構造を想定したものだったため、新たな変化によって顕在化した格差が射程外におかれてきた。たとえば、従来の枠組では正規・非正規の区別はされず、母子世帯出身者や移民は研究対象から除外されてきた。そこで、階層・移動研究の既存知見と結びつけながらも、その既存枠組をこえ、21 世紀日本社会のクリティカルな不平等構造を提示することをねらう。

報告 1:「結婚・家族と所得格差」鹿又伸夫
報告 2:「非初婚継続家族と社会階層」稲葉昭英
報告 3:「社会階層をめぐる制度と移民労働者」竹ノ下弘久
報告 4:「階層意識研究の展望」吉川徹

シンポジウムおよび本特集のタイトルは少々おおげさすぎるかもしれない。しかし、コーディネーターを仰せつかった私には忸怩たる思いがあり、それがシンポジウムの企画趣旨となった。それは、日本社会の不平等や格差の拡大にかんする研究が活発化して、一般の人びとの関心も高まったが、社会学とくに階層・移動研究がインパクトをあたえる場面はそれほどなかったからである。むしろ他分野とくに経済学関連領域からの研究が、不平等・格差の新たな問題を発掘し、提起してきたように思える。もちろん社会学の研究もあったが、格差があるから格差社会だという論調をこえて、新たな不平等・格差問題を発見し、その発生メカニズムを問い直すような研究は希有であるように思う。

社会学の階層・移動研究はバスに乗り遅れた。新たな不平等・格差の問題への鋭敏さを欠き、

鹿又伸夫「特集『21 世紀日本社会の階層と格差』序言」
『三田社会学』第 17 号（2012 年 7 月）1-2 頁

対処が遅れたのである。その根幹には、標準的な「進学・就職、職業キャリア、家族ライフサイクル」などにもとづいた既存の研究枠組への依存があった。依存といわずとも、研究枠組の再構築が遅れている。従来の標準的な人生行路にもとづいた研究枠組は、現実の側から挑戦されている。たとえば、新学卒者の就職内定率低下、非正規雇用の増大、正社員化の困難と失業長期化、未婚化・晩婚化の進展、離婚の増加、単身世帯・高齢者世帯の増加、貧困率増大、子どもの貧困などなど。われわれの人生は、ライフイベントとそれにともなうさまざまな移動をきっかけに、いつでも誰でも生活の危機に曝されやすくなったように思える。そして、新たに出現した不平等・格差問題は、21 世紀のこれから長期にわたって日本社会を悩ませるように思える。

本特集の各論文は（シンポジウム報告ももちろんだが）、企画趣旨をふまえ、いずれも既存の研究枠組にとらわれず、これまでなかった視座から不平等・格差を議論したり、取りあげられなかった不平等・格差にサーチライトをあてるものになっている。なお、最初の論文「社会階層を通して見る日本社会の変容―シンポジウム報告を受けて―」（織田輝哉）は、シンポジウムでの報告と議論を総括し展望を与えるもので、シンポジウムでの議論、そしてシンポジウムと本特集論文との関係を理解する助けになる。本特集が不平等・格差にかんする今後の社会学研究に資すれば幸いである。

（かのまた　のぶお　慶應義塾大学）